

地元学を活かした農村都市協働プログラムについての研究

松下桐子¹・笹谷康之²

¹学生会員 立命館大学 理工学部土木工学科

²正会員 工博 立命館大学 理工学部土木工学科

本研究は、梅ヶ谷集落を事例に地名やGISを用いた景観変遷調査と、地元学に基づいて住民が参加する地域資源の再発見を踏まえて、農村都市協働プログラムを提案することを目的とする。集落を維持するためには宅地周辺のゾーン内と重要な水源である水路を保全して、定住環境を整えていくことが重要なことを示した。そして地域住民と集落外の利害関係団体が未活用経営資源と不足経営資源を補完して、連携して耕作地維持と竹林繁茂防止の協働プログラムを実施することが有効であることを提案した。

Key Words : place names, landscape change, localogy, rural-urban collaboration program

1. はじめに

地元学は、地元住民が主体となって、地域外の人々の視点や助言を得ながら、地元を客観的に再発見し、地域独自の生活を日常的に創りあげていく知的創造行為である。地域には地域固有の風土と味わいがあり、それを探っていくことは「過去を知り、変化を予測しなじませ、未来を共有して今を創っていくこと」である。これからの地域をつくっていくためには、これまでの地域の固有性・地域のありよう・個性を自覚することが不可欠である。なお地元とは生活圏域であり、集落、中学校区などのコミュニティを指している¹⁾。一方、地形・場所の特徴を分析していくため地名を科学的に取扱う必要があること、主要な地名の語源は地形にあり、地形条件が場所性を規定する主因であるとされている²⁾。両者とも農村環境整備のために有効な手法であるが、景観変遷の分析に地名を用いつつ地元学を行う研究はみられなかった。

そこで本研究では、宮津市の梅ヶ谷集落を事例に^{注1)}、地名を用いた景観変遷調査と地元学に基づく住民レベルでの地域資源の再発見に基づいて、農村都市協働型の集落振興プログラムを提案することを目的として、以下の点を示す。

- ①地名の特色と耕作地や山林の土地利用変遷を定量的に捉えて把握して、集落として維持すべき空間を統合的に明らかにする。
- ②地元学にのっとり住民とともに地域資源調査をすることにより、その集落住民の内発的なニ

ーズを掘起こし、その実現性を検討する。

- ③集落の利害関係団体の有する未活用な経営資源と不足する経営資源を明らかにして、それらを補完して地域振興につなげる協働プログラムを提案する。

2. 研究手法

(1) 対象

a) 京都府宮津市梅ヶ谷

梅ヶ谷は、京都府宮津市の中心市街地から北に10kmほど離れた山間にある中山間集落である。2003年現在世帯数7戸、人口10人であり、南東向きの斜面に沿って集落が立地している。

b) 地球デザインスクール

地球デザインスクール（以下地DS）は、京都府が計画を進めている、「丹後海と星の見える丘公園」（2006年開園予定）をメインフィールドとして活動しているNPO法人である。地DSでは、自然と共生する公園をめざして、自然共生の実験事業、自然と地域文化と共生技術が学べる教室事業、集う人たちの交流事業を行っている。地DSでは、2003年に梅ヶ谷の元農家の建物を借りて、これを「内庵」と命名して改装し、地元での活動の拠点にしている³⁾。

c) NICE

NICEは環境や福祉等に関するボランティアを行う国際的なNPO団体であり、学生、若い社会人で構成されている。世界の若者が集まる国際ワークキ

キャンプや、国内で土日に週末ワークキャンプと呼ばれる体力を使う肉体的なボランティア活動を行っている⁴⁾。NICEの関西の週末企画チームが地DSの活動の趣旨に共鳴したために、地DSは2003年から週末ワークキャンプの受け入れ団体となった。

(2) 研究方法

a) 地名の語彙素分析

集落の小字・通称地名を、地域の聴取り調査で収集した。収集した地名を、一語構成の地名は「単純」、二語構成の場合は「語頭、語尾」、三種類以上の構成の場合は「語頭・語央・語尾」に分割して語彙素を分析してその語彙素を『地名用語語源辞典』⁵⁾より解釈した。この分析により、集落到住人々がどのような語彙素によって環境を認識していたのか、またどのような土地利用、景観、地物が強く認識されていたのかを明らかにする。

b) GISによる土地利用の復元

GISを用いて、対象地の①1890年代(明治20年代)、②耕地整理以前の1970年代、③耕地整理以後の1990年代の3つの時代のデジタルマップを作成し、土地利用の復元を行った。復元した地域は、対象地である梅ヶ谷の地区内である。また、作成したGISデータから各土地利用の面積を算出し、各土地利用面積の経年変化を分析した。使用データを表1、6種の土地利用分類を表2に示す。

表-1 使用データ

名前	作成年	縮尺	利用目的
宮津市地形図	1893年複製図	1/20000	1893年の土地利用分析
丹後森林基本図	1971年修正	1/5000	1971年の土地利用分析
宮津市全図(2)	1993年	1/10000	1993年の土地利用分析
空中写真	1975年撮影		1971年の復元補助
空中写真	1994年撮影		1993年の復元補助

表-2 土地利用分類

水田	湿田、水田、田
畑	畑、桑畑、田以外の農用地
山林	針葉樹林、広葉樹林
竹林	竹林
荒地	荒地
宅地	住宅地

c) 「庭先地元学会」による調査

地DSのイベントである「庭先地元学会」を企画し、表3のスケジュールに沿って地域住民、NICEとともに以下の手順で地元学に基づく地域資源の掘起しと共有を行った^{注2)}。

◆キーパーソンとなる住民の案内で集落内を歩き、気付いた点を記すとともに、住民から質問に答えてもらい、それをデジタルカメラで写真撮影した。

◆全戸の住民の家や庭において、地図を見ながら聴取り調査を行った。どこに水が流れているのか、農地はどのように変わったのか、どの植物は食べられるのかなど、昔の知恵や技術などについて聞いて、地図にプロットしていった。

◆調査結果を筆者らがとりまとめてプレゼンテーション用の資料を作成した。この資料を基に、地元学発表会において複数の地元住民が成果を発表し、メンバー全員で議論した。

◆随時、NICE、地元住民、地DSに対する地元学の成果を活用する意向についてヒアリングした。さらにNICEからは、e-mailで参加した感想について自由回答のアンケートを受取った。

表-3 調査スケジュール

日時	活動方法	内容	参加者		
			NICE	地域	地DS
2003年 9月27,28日	第1回庭先地元学会	・これからの調査方法について ・キーパーソンの抽出 ・植物調査 ・内蔵整備 ・梅ヶ谷の地図作り	11人	6人	5人
10月4,5日	個別で調査	地域住民にヒアリング調査		4人	
11月2,3日	第2回庭先地元学会	・内蔵整備、草刈 ・バンクラフのお手伝い ・植物調査(庭、畑)	14人	5人	3人
11月23,24日	個別で調査	地域住民にヒアリング調査		2人	
12月7日	個別で調査	地域住民にヒアリング調査		1人	
12月20,21日	第3回庭先地元学会	・調査結果の地元学発表会 ・もちつき、忘年会 ・内蔵整備	11人	12人	6人
12月29日	個別で地元学発表	梅ヶ谷住民に対する地元学発表		4人	4人
2004年 2月28,29日	第4回庭先地元学会	・今年度の反省会 ・モデル作り	25人		5人

3. 景観変遷

(1) 地名から読み取る空間構成

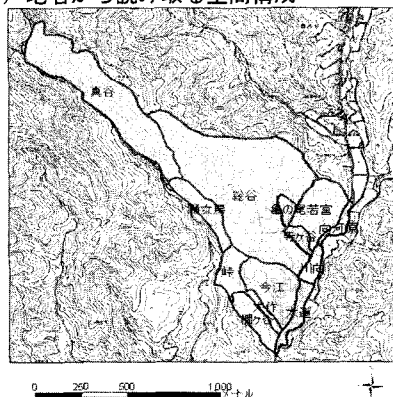


図-1 梅ヶ谷の小字

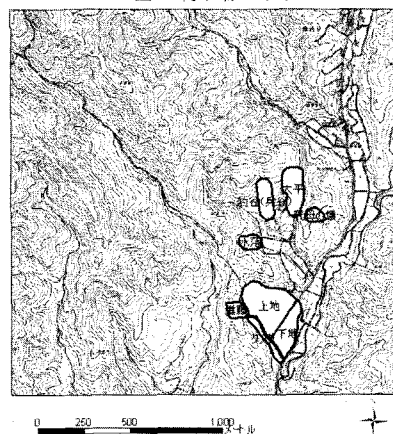


図-2 梅ヶ谷の通称地名

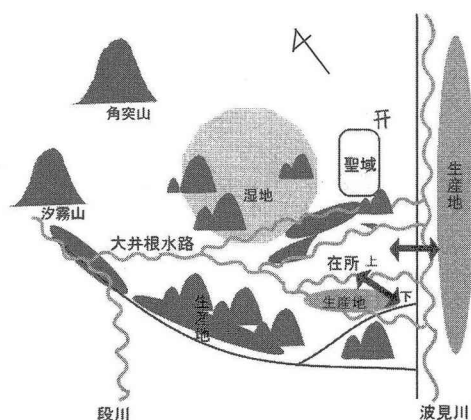


図-3 地名分析から得られた空間構成

調査より、図1の小字と、図2の通称地名と、河川名が収集できた。これらより集落空間構成は、図3のように表すことができる。梅ヶ谷では、「真谷」「棚ヶ谷」「総谷」など「谷」と付く地名が多く見られる。集落の西側は奥山まで谷が続いている。宅地が密集している場所は在所と呼ぶ。北側に行くほど高い位置となっており、通称では集落の北側が「上地」、南側が「下地」と呼ばれている。また、大井根水路や波見川、段川に沿って、耕作地が位置していた。「大井根水路」は「大」+「井根」+「水路」と語彙素を分割できて、「大きな川を水源とする水路」という意味である。用水の下を「水路」と呼ぶことから、梅ヶ谷の利水にとって重要な水路であったことが分かる。

(2) 景観復元

a) 明治時代の景観

図4は土地利用である。段川から引いてきた水が流れる大井根水路や波見川などの谷線に沿った土地は、谷頭部まで細長い水田が作られていた。山腹から上では、1年目にそば、2年目に小豆、3年目に大根を作る7、8年周期の焼畑が行われていた^{注3)}。

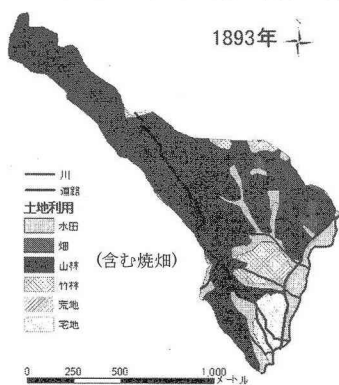


図-4 明治時代の土地利用

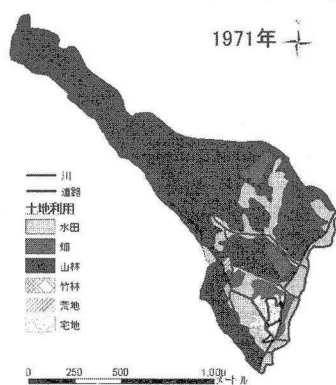


図-5 耕地整理以前の土地利用

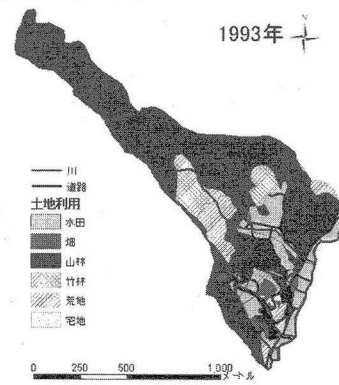


図-7 耕地整理以後の土地利用

b) 耕地整理以前の景観

図5,6は土地利用である。梅ヶ谷では水が得られにくく水田として利用するのが困難なため、集落から2 km以上離れた山の中にまで牛を連れて往復し、ジュル田と呼ばれる湿田の耕作や、焼畑、炭焼きを行っていた。細長い湿田は地図や空中写真からは判読できなかったが、聴取で明らかとなった。少しでも水が得られる場所は、ほとんど水田として利用していた。谷の水は冷たいため、「カラスモチ」と言われる冷水に強い稲を植えていた。また、田の上には入会地の草刈場があり、屋根を葺くための笹を刈ったり、ジネンジョやフキを採ったり、牛の餌場としていた。野菜は宅地の近くの畑で栽培しており、薪は宅地周辺の山林から得ていた。耕地整理以前までは、集落から2km以上離れた場所まで梅ヶ谷の生活領域だった。

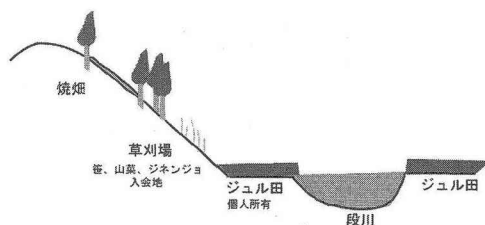


図-6 耕地整理以前の土地利用の断面

c) 耕地整理以後の景観

図7,8は土地利用である。図9に示すように、水田と畑の面積が減少して、荒地や竹林の面積が拡大した。人口の減少とともに、宅地近傍にある、基盤整備がされた水田と、自家用の野菜を作る畑だけが維持されるようになった。山林はスギやヒノキの植林地が増えたが、近年人の手が入らなくなり荒廃した。耕地整理以前に奥山の畑に行くための道として利用していた谷沿いの道は、現在、竹林や雑草で荒れてしまった。

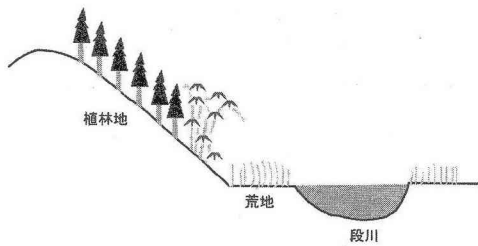


図-8 耕地整理以後の土地利用の断面

d) 景観の変遷

各年代別に作成したGISデータから各土地利用の面積を算出し、全体の面積に対する各土地利用の面積の割合と、その変化パターンを図9で表した。水田や畑といった耕作地は20年間で大幅に減少している。耕地整理を契機に放棄された、山際にあった小さな水田がなくなったことと、表4から分かるように、過疎化が進んでいて耕作者不足による耕作地の放棄が原因であると考えられる。逆に、竹林は、1970代からここ20年間で繁茂し始めている。また、荒地もこの20年間でかなり増大している。奥山の耕作が放棄され、竹、笹などを活用することが少なくなったことと、近年ではスギやヒノキの木材としての価値が下がり、管理されにくくなったため、植林地で竹林が繁茂している。

表-4 各年代の戸数

	1870年	1940年	1970年	2000年
戸数	35	27	20	7

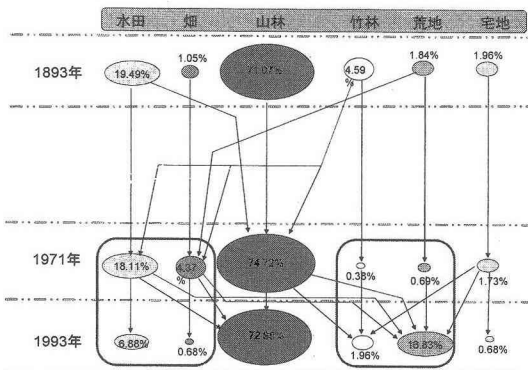


図-9 土地利用の変化パターン

(3) 保全すべき空間の現況

耕地整理以前では、居住地から2km以遠の広範囲に生産領域が広がっていたが、人口が減少したため、今日その領域を維持するのは困難となってきた。よって、現在図10に示すように、約400m四方ほどの居住地と波見川沿いと寺ヶ谷の耕地整理が

行われた水田を活用して、集落を維持している。いずれも南東向き斜面に位置しており日当たりがよくて、居住地の居心地としても、水田としても、自家用の作物を作る畑としても活用しやすい土地であり、現在の集落を維持できる最小限のゾーンであると考えられる。また、大井根水路は、江戸期に開削され、これらの家屋や田畑に水を供給する重要な水源であり、集落の重要なライフラインである。現在でも年1回の集落の共同作業や個別の見回りによって維持管理されている。住民が、水源の段川上流でワサビ等の採取を始めとする活動を兼ねた見回りを行っており、最も重要な谷を意味する「真谷」と呼んで最も案内したい場所として指摘していることから、集落のアイデンティティにとって重要な存在と判断できる。よって、ゾーン内とともに、この水路を維持し、保全していく必要がある。

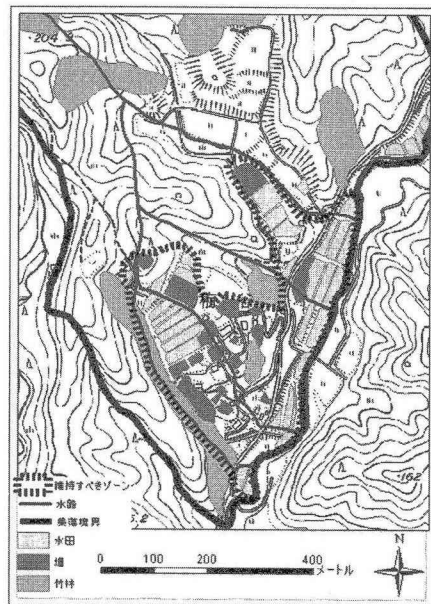


図-10 維持すべきゾーン

4. 地元学による地域課題の共有

(1) 「庭先地元学会」に対する住民の反応

a) コミュニケーションの場

地域住民から発表会で、「忘れていた昔のことをみんなで話し合ううちに段々と思い出していったのが楽しかった」「長老から自分の集落の知らないことを教えてもらって楽しかった」「都市住民と交流ができて良かった」といった意見が出された。住民同士が活発に意見を出し合い、高齢者が若い

世代に焼畑、炭焼きや「ヤツデは精神安定剤として使った」など昔の知恵を語って、会話がはずんでいた。

b) 地域づくりへの意欲の向上

地元学を行っていく過程で、昔は海草の押し花を作って遊んでいたという話で盛り上がり、地 DS で押し花を売れないかという意見が出された。30 年ほど前にズイキビを栽培していた話をきっかけに、十穀米を作って売りたいという意見も示された。また、地元学の発表会の地元の司会者は、その司会が好評だったので「実際にエコツアーガイドをやりたい」と言い出した。このように、地元学を通じて住民が地元の知恵を再発見することで、積極的に行動しようという意識が向上した。

(2) 住民が示した集落の主なニーズ

a) 定住者の入居の希望

現在集落の人口は 7 戸 10 名となり、ほとんどが高齢者であるため、自治会の機能が維持できない状況に直面している。住民 1 人当たり 2,3 の役を負わなければならない状態であり、特に自治会長職になると自動的に 10 数の役を兼ねることになる。よって、梅ヶ谷への移住者を望むという意見が多かった。

b) 荒廃化した農地の活用

放棄されて荒れた農地が多いため、何とか農地を維持したいという強い意志が出された。農地を維持して定住者を受け入れるために、営農組合や受託制度などの仕組みの整備が必要だという意見が出された。

c) 竹林の繁茂の対策

集落の西側の斜面やスギやヒノキの植林地に竹が繁茂しすぎているという問題点が挙げられた。

d) 地域の魅力向上

定住者を集落に呼び込むための魅力づくりとして、丹後米、山の芋、マツタケなどの地域ブランドを確立してアピールしたいという意見があった。

e) 集落の課題

大井根水路の維持にはまだ余力があっても、農地の保全や竹林の伐採を含め、現在の人口では集落を維持する限界に近いことや、そのような中でも地域の魅力を発信したいという意向があることがわかった。

(3) 住むための条件の明確化

2002 年度に梅ヶ谷に近接する地 DS のセミナーハウスで夏休みに一ヶ月間滞在した短期実習生の体験と提案から、2 年間定住すると仮定した場合の長期実習生の受入上の課題を抽出した⁶⁾。その

課題に対応して、定住を促進するための条件を表 5 にまとめた。外食や買い物の必要性和は、現実的に解決が難しいが、農村生活を体験したことのない人が定住したときに、ときどき都市に出て生活のリズムを整える必要性を基本的に意味している⁶⁾。他の条件に関しては、短期的には解決が難しい課題もあるが、中長期的には解決の糸口がある。現況の住むための条件を考慮すると、2004 年度から「内廬」に住む予定の地 DS の職員が長期滞在のモデルケースとなり、地元と調整しながら、梅ヶ谷での定住者確保の可能性を検討していくことが現実的だと考えられる。

表-5 定住を促進させる条件

丹後半島での不便な点	住むための条件
生産と生活が切り離されたことで、自然が放置されている	生活環境、景観の整備
担い手が減少、高齢化し、荒廃が進んでいる	地域の付加価値を作る
利用者(都市部)にとって遠い	定住者のための住居
新しい住まいが必要	外部からの定期的な情報
空き家が少なく、離れなら貸してくれるかも	近頃の買い物をする場所
テレビや新聞といった外部の情報が入ってくるものが少ない	外食場所の確保
虫が多い	移動手段の確保
買い物する場所が近くにない	就業の確保
外食場所が少ない	継続的な農業の安定性
移動手段が少ない	
現金収入の問題	
雇用の場が少ない	
働くところが少ない	
自給自足は大変	
3度の食事をするのが大変	
農業は厳しい	
農業のみで生活していくのは厳しい	

5. 交流プログラムの提案

(1) 梅ヶ谷の利害関係者の未活用・不足資源

梅ヶ谷の従来の主な利害関係者は、地域住民とその団体、隣接集落や旧村単位の組織、集落から出て行った不在地主など地元で収斂する。庭先地元学会の活動を通じたヒアリング結果から、この活動の利害関係者である三者の未活用経営・不足経営資源を抽出して表 6 に示す。

a) NICE

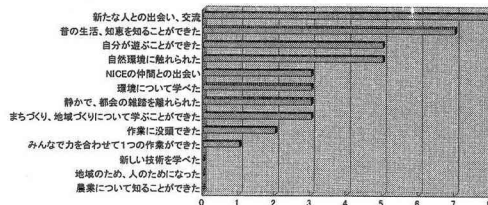
ヒアリング、アンケート調査の結果より、地 DS のイベントに参加したきっかけとしては、星、雪景色などの「自然環境」や、環境との共生を考えた「地 DS の活動」とする回答が目立った。しかし、参加後の感想としては、「住民との交流」「地元の知恵、技術」が良かったという意見が多かった。図 11 を見ても、「新たな人との出会い、交流」が良かったという回答が最も多く、次いで「昔の生活、知恵を知ることができた」という回答にな

表・6 各組織の未活用・不足経営資源

	未活用経営資源	不足経営資源
NICE	労働力 ボランティアに関する情報 集落の魅力顕在化力	環境に関する知識 NPOに関する知識 まちづくりに関する知識 地元の昔からの知恵 得た知識を活かす場 星空 雪景色 住民との交流 農業体験 草刈り 郷土料理の知識 料理する場 植物に関する知識 ゆったりとした時間 NICEメンバーとの触れ合い パン作り ペンキ塗り
地域住民	遊休農地 竹 植物 農業体験 植物に関する知識 農業に関する知識 炭焼きの知識 縄ないの知識 余った野菜 食材 郷土料理 星空 雪景色 景色 豊かな自然環境 空家	住民(定住者) 地域のPR アピールできる資源 地域ブランド 仕事 外部からの刺激 営農組合、農地受託制度などの 土地を管理する組織やシステム
地DS	参加者の募集 ホームページ イベントの企画力 メールマガジン NICEのコーディネート力 車 カメラ ナタ 常駐スタッフの公募 セミナーハウス 内蔵 公園の敷地 公園内の木材、竹 環境共生に関する知識 各専門分野の専門家	地元の環境共生の知恵・技術 (公園作りに活用) 梅ヶ谷に関する知識 (エコビレッジ化) 公園を作るためのボランティア 植物に関する知識 (エディブルガーデンに活用)

っている。交流を通じて住民と親しくなり、「また会いたいから再び参加した」という意見も聞かれた。地元学を通じた地域住民との交流がイベントのリピーターを増やすきっかけとなる。第4回のイベントで行われた反省会では、地元の素材を使った地元の料理を教えてもらいたい、もっと住民と密な関係を持ちたい、地元にもっと貢献していきたいという意見が出された。一方、NICEが基本的に求めている活動は肉体労働であり、くたくたになるまで働いて汗をかきたいという要望が多い。第1回から3回までのイベントでは肉体労働を必要としたプログラムが少なかったため、イベント後での反省会で「もっと働きたい」といった意見が多く出された。それに対して、第4回目では肉体労働を中心とした活動があったため、充実感があったという意見が多かった。また、地元学で知った地元の知識を活用して、横井戸を復活させたい、露天風呂を作りたい、地元の方が話している姿を映像として残したいなどのアイデアがNICEのメンバーから出された。

n=8



図・11 NICE メンバーの感想

b) 地域住民

自治会活動が維持できないため、地縁、血縁関係にこだわらず定住者が欲しいし、外部からの移住者でも構わないという意向である。そのために、定住者促進に向けた生活環境整備をしたいとされた。特に、荒廃した遊休農地、竹林をどうにかして、地域のPRをしたいというニーズが得られた。

また、地域からは遊休農地、竹素材などの天然資源、炭焼き、縄ないなどの昔の知恵や技術が提供できる。各戸で作りすぎて余っている野菜やそれを活かした郷土料理なども提供できる。

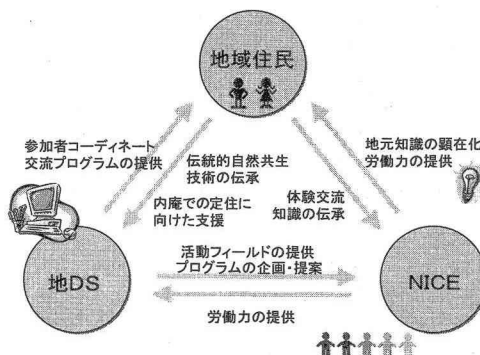
c) 地DS

昔の知恵、エコ技術など、公園づくりに活かせる「自然共生技術」を地元から得ることを望んでいる。梅ヶ谷に地DSのこれからの拠点となる「内蔵」ができたのをきっかけとして、梅ヶ谷をエコビレッジにする意向を持っている。また地DSでは、公園を作っていくための多様なパートナー、労働力がほしいと考えている。

また、地DSからは、Webなどによる情報発信、イベントの企画、NICEなどの組織のコーディネートなどが提供できる。イベント時の道具や宿泊施設なども提供できる。

(2) 利害関係団体の協働プログラム

a) 利害関係団体の協働



図・12 利害関係団体の協働

不足の経営資源を補完する、3組織の協働のための連携を図12で示す。

地域住民は、天然資源の活用方法や生業の方法など、集落の昔からの伝統的な自然共生技術を地DSやNICEに対して提供できる。「内庵」に住む地DSのスタッフに対して、定住を支援できる。

NICEは、地域住民には竹の伐採など生活環境の整備のための労働力、地DSには公園を作るための労働力を提供できるし、外からの目で集落を見つめることで住民では気づきにくい地元の知識を顕在化することができる。

地DSは、梅ヶ谷を対象としたNICEと住民をコーディネートして協働プログラムを企画、提案することができる。

b) 農村都市協働プログラムの提案

以上をまとめると、段川が流れる真谷は、来訪者のためのエコツアーの場と利用しつつ引続き保全し、耕地の保全や竹林の伐採といった活動を都市住民の労力を使ってこ入れしつつ、中長期的な定住者を確保することが、農村都市交流型の振興方策であると考えられる。そして短期的には、梅ヶ谷における農村都市協働プログラムとして以下の2つの提案が現実的と考えられる。

◆ 耕作地維持プログラム

集落では農地のオーナー制度、受託制度の整備に対する要望が強かったが、定住者でないと農業を行うのは困難である。よって、2004年度に梅ヶ谷に住む地DSの職員と共に、まずはNICEが農業の支援を行っていくのが現実的である。年間を通じての農作業体験のプログラムを実施していき、その経験の中で農地のオーナー制度や受託制度のフィージビリティを検討することが望ましい。

◆ 竹林繁茂防止プログラム

宅地や植林地にまで竹の繁茂が進んでいること、NICEが労働を求めていることを踏まえ、植林地の竹を切り出してきて、その竹を活用するプログラムを提案する。第4回庭先地元学会では、丹後海と星の見える丘公園において、モノレール作りの作業の一環として、計30名で敷地の竹林の伐採を行い、見る見る繁茂する竹林を整備して、NICEの労働の要望を納得させ達成感を確認できる成果を挙げた実績がある。切り出した竹を利用した竹炭や竹楽器づくり、竹の植木鉢などの竹細工づくり体験を行い、できたものはNICEのワークキャンプ参加者へのおみやげにしていき、地域の文化祭に出品することなど竹材の活用が考えられる。また、春にタケノコ掘りを企画して、モウソ

ウ竹をタケノコのうちから駆除することが重要である。採ったタケノコで郷土料理の教室を開くことも考えられる。

6. 結論

以上の成果をまとめると、農村都市協働型の集落振興の例として次のような点が明らかになった。

①従来の広い領域を維持するのは困難になったが、現在維持されている南東向きの集落近傍の宅地・田畑のゾーンと、これらに水を供給するとともに象徴的な意味もある大井根水路とを、集落維持のためにセットとして保全していく必要がある。

②協働で地元学を実践することにより、集落の住民が地元を再発見し、地域づくりに対する意欲を向上する効果があることを確認した。荒廃する農地の活用や竹林の管理が短期的な課題であり、地DSがモデルケースを作って困難が大きい定住者の入居を促進することが中長期的な課題であり、それらの中で地域の魅力を発信していく必要性があることが明らかになった。

③肉体労働を求めるとともに、地元学によって地域を知って共有することに意義を感じるNICE、自然共生技術を開発して、エコビレッジの実験フィールドを求めている地DSが、地元集落と未活用資源を補完することが重要であることを示した。そのための農村都市協働プログラムとして、短期的には耕作地維持プログラム、竹林繁茂防止プログラムを実施することが、有効な地域振興策であることを提案した。

地名の調査分析やGISを用いた景観変遷の分析からは宅地周辺ゾーンとともに大井根水路が重要なことがわかったが、地元学を用いて顕在化させた意向からは、宅地周辺ゾーンの維持にニーズが集中した点は注目できる。宅地周辺ゾーンの顕在化した地元ニーズを短期的な農村都市協働プログラムに据えつつ、大井根水路などの重要な空間を機軸に、多面的な地域資源の活用を中長期的に目指していく方向性が示唆された。

謝辞：地元学の立場から連携して梅ヶ谷の調査に加わっていただいた浦嶋裕子さんや、梅ヶ谷の方々、地DSやNICEの参加者の方々に感謝いたします。

補注

注1) 1998年度の国土庁調査によれば、2008年度までの10年間に約500集落で人の住まない消滅状態の集落が

出現し、その後消滅の可能性のある集落を含めると約2000集落に上るとしている。また消滅はしないが衰退する恐れのある集落は11000集落に達すると推計している。こういった中山間地域では国土保全や伝統文化の継承が困難になることが予想されている。この危機的な状況の中で、本研究対象の梅ヶ谷は、都市農村協働の中で生残りを図る可能性のある集落の事例として取上げた。

注2) 梅ヶ谷を含む旧村単位のまちづくり検討組織である養老未来委員会では、各集落単位で振興計画を策定することが提案されたが、人数が少ない梅ヶ谷ではできなかった。このような状況の中で、本来地域住民が主体的に調査をする地元学ではあるが、地DSが中心となり調査結果を取りまとめ、地元住民は地元発表会を主導する分担方式をとった。なお、地DSにとって庭先地元学会の主たるテーマは庭先の果樹や野菜などの栽培と活用であったが、筆者らはそれに便乗しつつ集落全域での独自の調査も行った。

注3) 1893年(明治26年)の1/20000地形図からは図化・計量化できるまで判読できなかったが、この時代の山林には焼畑や草刈場が含まれている。また、段川に沿った幅2～3m程度の水田は判読できなかったが、ヒアリン

グと現況の土地形状からその存在が確認できた。図-4に示す以上に、小さな耕作地が広がっていたと判断できる。

参考文献・URL

- 1) 吉本哲郎「風に聞け、土に聞け【風と土の地元学】」pp190-255,『地域から変わる日本 地元学とは何か』,2001,農文協
- 2) 笹谷康之「地形の意味に関する研究」,博士請求論文,pp252,1990
- 3) 地球デザインスクールWebサイト
<http://www.e-ds.jp/>
- 4) NICE Webサイト
<http://nice1.gr.jp/>
- 5) 楠原佑介、溝手理太郎「地名用語語源辞典」東京堂出版,1983
- 6) 丹後半島環境学習拠点ネットワーク協議会「丹後半島環境学習拠点ネットワーク事業報告書」,2003

A study on rural-urban collaboration program using locality

Kiriko MATSUSHITA, Yasuyuki SASATANI

As for this case study at Umegaya settlement, aims at proposing a rural-urban collaboration program based on the re-discovery of the area resources that an inhabitant participates based on locality and the landscape change surveying using place names and GIS. The waterway that was the important source inside the zone around the residential zone was preserved, and a settlement was shown that it was important to prepare a permanent environment to maintain it. Then, a group related to the interest outside the settlement complemented un-use management resources and shortage management resources with the area inhabitant, and kept in touch, and it was proposed that it was effective to enforce arable land maintenance and rural-urban collaboration program of prevention of bamboo zone growing thick.